

# ユニオン ディスユニオン 連合／分離の寓話としてのヨークシャー学校小説

——地域間のポリティクスとパワーバランスの展開——

武田 ちあき 埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：学校小説、ヨークシャー、アイルランド、ウェールズ、スコットランド

## 1. 序

サッチャー時代のイギリス教育をユーモアたっぷりに描いたジャーベイズ・フィン (Gervase Phinn, 1946-) の一人称小説、『谷の裏側』(*The Other Side of the Dale*, 1998, 以下I)、『丘を越え谷を越え』(*Over Hill and Dale*, 2000, 以下II)、『谷でてんやわんや』(*Head Over Heels in the Dales*, 2002, 以下III)、『谷でうろうろ』(*Up and Down in the Dales*, 2004, 以下IV)、『谷の奥』(*The Heart of the Dales*, 2007, 以下V)の「デールズ5部作」は、物語の主軸がヨークシャー州教育委員会の教育行政に置かれており、ジャンルとしては学校小説でありながら、その作品空間にはきわめて政治的な風景が展開する。

主人公フィンの属する視学官チームは英国内の各地域の出身者揃いで、かれらの仕事上の協力関係・敵対関係は、地域どうしの歴史上の関係を象徴する。学校と役所を舞台に繰り広げられるドタバタやラブコメ、寸劇や笑劇は、じつは地域間の連合／分離の寓意であり、リンダ・コリー (Linda Colley) が *Britons* (1992) と *Acts of Union and Disunion* (2014) で論じているテーマの現代版・地方版なのだ。

本稿では、「デールズ5部作」において連合／分離の推進力かつ媒体となっている二つの要素、ユーモアと言語に着目し、これらを介して物語中に比喩として示される地域間のポリティクスとパワーバランスを分析することで、この作品群の寓話性、および作者フィンの諷刺精神を解明し、それらが現在の英国の社会情勢に対して持つ政治的意味を提示したい。

## 2. フィンの構造改革

フィンの作品空間では、アイルランド・ウェールズ・スコットランドが連合し、イングランドから分離して、ともにヨークシャーに仕える。通常のヒエラルキーにおける頂点と底辺を入れ替え、イングランドとヨークシャー、中央と地方の上下を逆転する、この構造改革の図式は、登場人物の造型・配置・相互関係に、巧みに仕込まれている。

### 2-1 勢力図

ヨークシャー州教育委員会で主人公を取り巻く登場人物を階層別に整理すると、その出身地域の配分は次の通りである。

- ①上司2名 (教育長、主任視学官。教育長私設秘書・主任視学官後任候補・主任視学官後任も

含めると、のべ5名。) いずれもイングランド系、ないしイングランド志向。

②視学官4名。うちアイルランド系3名、ウェールズ系1名、兼・スコットランド系1名。

③秘書・掃除婦、計2名。どちらも生粋のヨークシャーっ子。

すなわち、物語の初期設定としての地域の序列は、帝国主義体制の歴史的現実をなぞっている。

しかしフィンのプロットでは、そのピラミッドがまるごとひっくり返り、ヨークシャーがてっぺん、アイルランド・ウェールズ・スコットランドが中段、イングランドが最下段、という割り当てに収まる。このオルタナティブな勢力図の成り立ちを、まずは押さえよう。

#### (1) メンバーのルーツ

上司たちについては3. で後述するとして、先に視学官チームのルーツを見ていく。

英語科・演劇科担当のフィンは、アイルランド移民の息子で、父方の祖母はスコットランド出身。<sup>1)</sup> フィンの人生を変えた中学の名教師たち<sup>2)</sup>はウェールズ系。働く先はヨークシャー。4地域をカバーするフィンは、ひとりでこのチームの縮図となっている。

美術科・芸術科担当のシドニー (Sidney) は、アイルランド人の典型。とにかく饒舌で、日常の会話も芸術上の作風も、過剰さと独創性が特徴。機知とひらめきに富む、衝動的な気質。

数学科・体育科担当のデイヴィッド (David) は、ウェールズの守護聖人の名。妻グウィネス (Gwynneth) もウェールズ語で「至福」(Jarvis 45) を意味する、ウェールズ女性に多い名。夫婦は名前からして「ウェールズ代表」の寓意を与えられている。マシングントークが持ち味で、妻とはウェールズ語で話し、なにかにつけてウェールズのおばあちゃんの知恵<sup>3)</sup>を引用する。

理科・技術科担当のマラーキー博士 (Dr Mullarkey) は、フィンの敬愛する母方の祖母<sup>4)</sup>の名を借りたキャラクターで、アイルランド系の美女。

視学官秘書のジュリー (Julie) は、ヨークシャー人特有の率直な物言いで、有能・快活。

教員研修所掃除婦<sup>5)</sup>のコニー (Connie) も、同郷の猛犬ヨークシャー・テリアにたとえられる激烈な猛女で、仕事ぶりでは右に出る者はいない。

#### (2) チーム構成

視学官チームを力関係から見ると、アイルランド代表のシドニーとウェールズ代表のデイヴィッドが、断然ツートップである。

アイルランド系が3人と多数派を占めることには作者フィンの思い入れが観取されるものの、新人で若手のフィンとマラーキー博士は控え目な人柄で、まさに控えに回っている。

ともに論客で威勢がいいシドニーとデイヴィッドは、アイルランド系とウェールズ系として、イングランドでは両者ともアウェイであるが、ふたりとも「遠慮なく言い合っている」という点では、なによりもヨークシャー的なのだ。

コニーは「陸軍元帥の司令杖」(III 36) さながらにハタキを構え、汚すシドニーと散らかすデイヴィッドを常に叱りつける。すなわち、かれらを統括・管理する監督はヨークシャーということになる。

また、ジュリーの事務処理能力は全員の仕事の要である。つまり、このチームはマネージャーもヨークシャーなのである。

このように視学官チームは、実質的に、他地域の者たちをヨークシャーの人間が束ねる構成となっており、そこにはヨークシャーの優越がアピールされている。

## 2-2 戦略

視学官チームが行うゲームの見せどころ、そしてこの小説シリーズの読みどころは、何と云っても、州教育委員会名物、シドニーとデイヴィッドの応酬である。ふたりの当意即妙、丁々発止、才気煥発で攻撃的な会話は、アイルランド対ウェールズの、地域の威信を賭けた国際試合であると同時に、アイルランドとウェールズの、絶妙の呼吸による連係プレーでもあるのだ。

フィンの構造改革において主要な戦略として機能する、かれらの得意技のレパトリーとその意義を、ユーモアと言語という切り口から、次に概観しておこう。

### (1) ユーモア——コンビプレー・その1

シドニーとデイヴィッドの毒舌対決の基本型は、以下の一例に見出される。

“You’re looking pretty chipper, Gervase,” remarked Sidney as I entered the room, humming...

“There’s a definite spring in your step,” continued Sidney, “an eagerness in your eye and rather a smug little smile playing about your lips. I could hear you whistling up the stairs like a blackbird with the early morning worm.”

“It would hardly be whistling, this blackbird of yours,” observed David, putting down his pen, “if it had a beak full of worms.” (II 57- 58)

（「こりゃまたゴキゲンだね、ジャーベイズ」とシドニーの評。私が鼻歌まじりで出勤してきたので……（中略）……。

「足どりには明らかなる弾み」とシドニーは続けた、「まなざしには熱意、そして唇をよぎるは、かすかなるひとり笑い。聞こえたぞ、君が階段を上ってくる時の、さながら早起きして捕まえた虫をくわえるクロウタドリのごとき口笛が。」

「無理だろ、口笛を吹くのはさ、あんたのそのクロウタドリさんとやらはよ」とデイヴィッドがペンを置いて論評。「くちばしが虫でふさがってるんじゃね」)

これは完全に、ボケとツッコミのパターンを備えた漫才である。事実、このふたりを同僚たちは「お笑いコンビ」(II 60, III 120)と呼ぶ。その話芸は、プロの芸人レベル。それがこの小説全編に、アイルランド対ウェールズの笑話集、ユーモア傑作選、お笑いアンソロジーといった観を与えている。

かれらのやりとりの本質は「ことばのピンポン」(II 60)、ないし「喧嘩っ早いチェス」(II 213)。これは一種のスポーツでありゲームなのだ。おたがいは敵ではなく相方。「仲良しこよし」ではないにしろ「けなし合うことでむつみ合う」この形は、対立以上に合意に基づいた協力関係である。緊張をはらむ口論ではなく、安心して笑いのめせる「お約束」。それは高度に知的な息抜き、職場の娯楽ですらある。(実際、このふたりが揃うと、おもしろすぎて他のメンバーは仕事にならない、という弊害まである。)

一方で、このペアが発揮するユーモアの力とことばの力は、フィンの小説が行使する政治力の原動力であり、フィンの乗り出す闘いの武器ともなる。ふたりの掛け合いは、そのユーモアとことばを磨き合い、武器の刃を研ぐ、軍事教練でもあるのだ。毎日のお決まりのおふざけは、地域間の団結力を強化するウェイトトレーニングの日課でもあって、おたがいにライバルの存在は、訓練

の効果を高める負荷として有効に作用する。このオフィスはジムの機能をも象徴的に果たし、地域間政争の闘士養成道場となっているのである。

## (2) 地域語——コンビプレー・その2

上述のように、デイヴィッドは、シドニーの弁舌に茶々を入れる。これに対し、シドニーは、デイヴィッドのウェールズ語をからかう。それがシドニーの迎撃の、定番ネタなのである。

シドニーの舌鋒のターゲットは、まずウェールズ語の音。その「珍妙さ」を、彼はこきおろす。

“And what in heaven’s name does that mouthful of guttural gibberish mean? Whenever you start spouting Welsh I always think you’re choking on a bone.” (II 59)

(「それに、いったいぜんたい、その長ったらしい、のどをガラガラ鳴らした、ちんぷんかんぷんな音は、どういう意味なのかね。きみがウェールズ語をまくしたてだすと、骨がのどに詰まったのかなって、いつも思うよ。)」

次に槍玉に挙がるのは、ウェールズ語の成句。

“‘Like a rat up a drainpipe!’” Sidney repeated, snorting. “What a wonderful way with words you Welsh have! ‘Like a rat up a drainpipe.’ Most original and descriptive. I don’t know how you have the brass neck to criticise my choice of words when you use that sort of hackneyed expression.” (II 59-60)

(「『下水管を上がってくるネズミみたい』だって!」とシドニーは繰り返し、鼻まで鳴らした。「なんとまあ素晴らしい、ことばの使いこなし方だろうかね、きみらウェールズの人たちときたら! 『下水管を上がってくるネズミみたい』だとき。このうえなく独創的で、光景が目に浮かぶよ。そこまで陳腐な表現を使うくせに、どのツラ下げて、ぼくのことばの選び方にケチがつけられるのか、ぼくにはわからんね。)」

さらに矛先が向くのは、ウェールズのおばあちゃんの金言。

“As my Welsh grandmother used to say— “

“Oh, save me from the Celtic words of wisdom,” interrupted Sidney. “This Welsh grandmother of yours sounds a pain in the neck, endlessly giving everyone the benefit of her homely advice. I would have consigned her to an old folks’ home years ago.” (III 26)

(「わがウェールズのおばあちゃんいわく——」

「ああ、かんべんしてくれよ、ケルトの名言は」とシドニーがさえぎった。「きみのウェールズのおばあちゃんってのは、悩みの種って感じだな、つまらない忠告をご親切にも、だれにでも、いつまでも垂れててさ。ぼくならとっくに、老人ホーム送りにしてるところだね。)」

このように平時にはウェールズのおばあちゃんの処世訓をけなすシドニーだが、いざ有事には

一転して頼りにする。

信頼する上司の早期退職の意向を聞かされて、打ちひしがれたシドニーは格言のリクエストを出す。

“Well, I’m devastated, Harold,” said David. “I don’t mind saying so. I’m completely lost for words.”

“Hasn’t that proverbial old Welsh grandmother of yours got an apt little saying for the occasion?” asked Sidney, shaking his head.

“I suppose she’d say what she said about Lloyd George,” said David sadly. “We will never see his like again.” (III 32)

（「うーん、愕然たる思いだよ、ハロルド」とデイヴィッドは言った。「そこまで言っちゃうよ。ほんとにもう、なんて言っていいたか。」

「例のことわざ名人、きみのウェールズのおばあちゃん、こういう時にいい寸言はないかねえ」とシドニーは訊き、首を振った。

「たぶん言うだろうな、ロイド・ジョージのことを言っていたやつをね」とデイヴィッドは悲しげに言った。「こんな人はこの先もう出てこないよ、ってね。」

フィンがその後任に昇進しそこなった時も、シドニーは慰めようと、名句を求める。

“...I’m sure your old Welsh grandmother would say to him if she were here, which I am thankful that she is not, that it is probably for the best.”

“She would almost certainly have said,” David reposted, “ ‘If you get knocked to the floor, pick yourself up, dust yourself down and start all over again.’ ”

“She could have made a mint writing lyrics for Hollywood musicals, your old Welsh grandmother,” said Sidney. (III 147-148)

（「……きっと、きみのウェールズのおばあちゃんなら、彼に言うだろうな、もしここにいたら、っていうか、いなくてありがたいけどさ、たぶんこれでよかったんだ、てなことを。」

「おばあちゃんだったら、ほぼまちがいなくこう言ったね」とデイヴィッドは応じた、「『床にのされちまったら、起き上がって、ほこりを払って、また歩き始めるだけのことだよ』ってさ。」

「ハリウッドのミュージカルで作詞したら、ひと財産こしらえてたろうな、きみのウェールズのおばあちゃんさ」とシドニーが言った。）

シドニーにしては珍しい、この手放しの賛辞は、じつはウェールズの先人の知恵に一目置いている、彼の本音が漏れたものだ。シドニーの軽口の底に秘められた、ウェールズの言語文化への敬意は、ふたりの同盟関係を支える地域語の力の証左なのである。

### (3) 英語——コンビプレー・その3とチームプレー

シドニーとデイヴィッド、すなわちアイルランドとウェールズのことばの力は、イングランドをも凌駕する。英語を豊かにしているのはアイルランド人とウェールズ人だ、と視学官チームは主張

するのである。

デイヴィッドは両地域の連帯を、ストレートに明言する。

“The Welsh have a great deal in common with the Irish, you know...the shared Celtic heritage explains why both races have such a love of and talent in music and poetry.” (V 61)

(「ウェールズ人はアイルランド人と共通点がすごく多いよね……両方ケルト系だから、音楽と詩を愛してやまないし、またそれに秀でてもいる民族なのさ。)」

シドニーもこの見解を、おどけ気味ではあるものの、全面支持する。

“I will grant you that the Welsh and the Irish do have something in common when it comes to language...and that is their inability to shut up....” (V 61)

(「きみの言うとおりに、ウェールズ人とアイルランド人には共通点があるよ、ことばについちやあね……どっちも、しゃべりだしたら止まらないってとこさ……。)」

フィンはこの民族性を総括するとともに、英語の使い手としての特性に焦点を当て、両地域のイングランドに対する優越を強調する。<sup>6)</sup>

“Well, it is a fact that the Irish and the Welsh do like to use words and have a lot to say for themselves...But I have to say that the Irish and Welsh are often better users of English than the English themselves...They embroider the language, make it more colourful, more inventive....” (V 61)

(「まあ、アイルランド人とウェールズ人は、ことばを使うのが好きで、自分で言いたいことがたくさんある、つてのは事実だね……でも、ぼくに言わせりゃ、英語の使い方じゃあアイルランド人とウェールズ人のほうが、本家本元のイングランド人より上手いことが多いよ……かれらは、英語に飾りを添えて、より彩り豊かで、より創意に富む言語にしているんだ……。)」

この傍証として、フィンはアイルランドを代表する文人、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) の警句を引用する。

“The Saxons took our lands from us, and left us desolate. We took their language and added new beauties to it.” (V 61)

(「サクソン人はわれわれから土地を取り上げて、われわれを惨めな状態に放り出した。われわれはかれらの言語を取り上げて、それに新たなる美を加えた。)」

そして英語に対し、アイルランドとウェールズ以上に、過激な改変で支配力を行使するのが、ヨークシャーである。コニーの大胆で強烈なことばの荒技を、フィンはこちら称える。

Connie had a delightfully eccentric command of the English language. She was a mistress of the malapropism and a skilled practitioner of the *non sequitur*. For Connie, English was not a dull and dreary business, it was something to twist and play with, distort, invent and re-interpret. She could mangle words like a mincer shredding meat. (V 76)

(コニーの英語の使いっぷりときたら、痛快なくらい奇天烈だ。滑稽な誤用の女王、突飛な発言の匠。コニーには、英語は単調で退屈なしろものではなく、ひねりを入れて戯れて、変形し、捏造し、解釈し直すべきもの。挽肉製造機にかけるみたいに、ことばをミンチにしてのける。)

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の『フィネガンズ・ウェイク』 (*Finnegans Wake*, 1939) のことか、と見まごう、このやり口には、まさにジョイスと同じ方向の、英語を踏み越えていこう、という政治的意図が潜む。

たとえば *cafetière* (ピストン式コーヒーポット) のつもりで *catheter* (カテーテル) (V 78) と口走るコニー。厨房用品を医療用具と混同することで、結果的に「たかがコーヒーひとつ入れるのに、わざわざそんなややこしいものを」といわんばかりの、お上品な都会派志向に対する批評性が表出している。

また “When one door closes, another shuts.” (III 182) は、「ひとつの扉が閉まっても、ほかの扉が開く」と言うべきところを間違って「戸がひとつ閉まりゃ、もうひとつも閉じる」と言ったもの。「チャンスはまた来る」の意が「泣き面に蜂」に反転。思うにまかせぬ現実を受け入れて笑いのめす、その逞しい精神性は、むしろ元の句よりも力強い励ましになる。

こうして英語も手荒に料理してみせるコニーのヨークシャー魂は、フィン所属チームのメンバーが擁することばの力においてもキャプテン級。コニーのことばは労働者階級の掃除婦の無教養に端を発してはいても、その起爆力ゆえに、視学官たちの学歴や出身地域を飛び越えた頂点にヨークシャーを位置づけ、同時にイングランドを一番下に蹴落とすものなのである。

### 3. 分離——イングランドから

フィンの構造改革がめざす大きな企図のひとつは、イングランドからの分離である。これを果たすべくテキストに埋め込まれた、英国性の捨象・擲揄・放擲、という三つの仕掛けを、以下に解き明かそう。

#### 3-1 英国性の捨象

ヨークシャーはそもそもイングランドの一地方であるが、フィンの世界では、ヨークシャー人であることとイングランド人であることは、基本的に両立しない。そして登場人物（とくに好人物）の持つ英国性は極力薄められ、骨抜きにされる。この英国性の浄化(クレンジング)ないし洗浄(ロンドリング)は、ヨークシャーのための、味方化の戦略なのだ。

## (1) 本人

イングランド語（英語）担当の視学官として、フィン是最もイングランドを代弁する人物であってもよさそうなものだが、その方面では、逆に最もおとなしい。あまりのおとなしさに、シドニーが食ってかかるほどである。

“And what did you think of the comely Miss Bentley of Winnery Nook?”

“She seems very nice.”

“Very nice? Very nice?” Sidney spluttered. “You are supposed to be our county inspector and resident expert on the English language, someone who has a flair in using one of the richest, most descriptive, most beautiful and powerful languages in the entire world and all you can come up with is ‘very nice’. She’s absolutely gorgeous, dear boy. Miss Bentley is a veritable vision! A Nordic beauty!....” (I 130-131)

（「で、ウィネリー・ヌック小学校長、麗しのミス・ベントリーの印象はどうよ？」

「とてもいい感じだね。」

「とてもいい？とてもいいだと？」とシドニーはせきこんだ。「きみは、われらが州視学官にして英語の専任、専門家ってことになってるんだろ、英語は世界中でいちばん、豊かで描写力に富み、美しくて力強い言語のひとつだぞ、その使い方目利きなんだろ、それで出てくるのが『とてもいい』だけだとはね！彼女は豪華の極致だぞ、いいかい。ミス・ベントリーは正真正銘、夢の女だ！北欧の美女だ！……）」

もともとアイルランド系・スコットランド系であるフィンには、「イングランド語を広めるイングランド人」というアイデンティティは、完全に不在である。

登場人物としてのフィンの言語の才は（ふだんはシドニーにまかせて、職場では封印しているもの）プライベートで見せる「きみの澄んだ目の湖に、ぼくの身を漂わせておくれ」（III 45）といたった調子のアイルランド的な饒舌にあり、これが地なのだ。

一方、仕事では単刀直入な物言いで、視察先の学校評議員に「おめえさん、ずばっと言いなさるのう。本物のヨークシャーもんだ、まちげえねえ……」（II 163）と感心されるフィン。

直球ならヨークシャー、変化球ならアイルランド。フィンの英語に、イングランドの出る幕はない。

## (2) 恋人

フィンの想い人、ミス・ベントリー（Miss Bentley）は当地の名士の娘で、イングランド系。だが「夢の女、フェトルシャムのヴィーナス、教育界のアフロディテ」（II 59）というシドニーの賛辞は、彼女を美神として神話化することで、英国性から遊離させる。

デイヴィッドが「あのミス・ベントリーはほんとにすてきな美人だよ、うちのおじいちゃんの言うとおり『ウェールズ人だったら、完璧だったのに』！」（II 59）と言うように、彼女がイングランド系であることは「惜しい」こと、減点対象なのである。

現実離れしているほど絶世の美女であるミス・ベントリーは、しかし気さくで気取らず、はつきりものを言う現実的な性格。シドニーの激賞をしめくくる決めゼリフ、「率直な女性」（III 28）とは、ヨークシャー女の理想型にほかならず、彼女の人物像は「ヨークシャー気質の持ち主」に着地する。



### (3) 上司

教育長ドクター・ゴア (Dr Gore) は、部下の視学官たちに大仕事を頼む時に湛える無気味な微笑が「吸血鬼ドラキュラ」(I 170, II 335, III 173)。この比喩により、彼のキャラクターはイングランドから東欧へずらされ、同志扱いが可能な存在に中和されている。(ドラキュラのほうが毒がない、とされるところには、イングランドへの敵意がにじんでいる。)

主任視学官ドクター・ハロルド・イエイツ (Dr Harold Yeats) も、イングランド性を抜かれている。Haroldという名は古英語でleader of men (人々の指導者) (Jarvis 46) の意であり、「視学官たちを率いる主任」という職務を象徴化した記号として、ある種の抽象的な存在となっている。またYeatsという姓は、むしろアイルランドへの近接性を匂わせる。なにより、「優しい巨人」(I 36, III 29) という個性は、フィンンの愛してやまないオスカー・ワイルドの童話「わがままな巨人」(“The Selfish Giant”, 1888)<sup>7)</sup>の主人公の化身で、ケルトの妖精伝承に連なる。

二人の上司はいずれも、物語の枠に取り込まれることで、英国性から隔離されるのである。

## 3-2 英国性の揶揄

フィンの世界では、ヨークシャー人とイングランド人は決定的に相容れない。その対立の構図を、ことばとユーモア、という二つの基準から概観すると、ヨークシャー人は、ことばは直截、ユーモアあり。イングランド人は、ことばは虚飾、ユーモアなし。全くの正反対である。

イングランド人はヨークシャー人を軽侮し、ヨークシャー人はイングランド人を揶揄する。そこにアイルランド・ウェールズ・スコットランドも参戦し、ヨークシャーと地域連盟を成して、イングランド揶揄作戦を大々的に展開するところが、「デールズ5部作」の真骨頂である。

四地域共通の標的となるイングランド的な人物としては、二人が配されている。いずれも、ことばが虚飾で、ユーモアがない点は一緒。ひとは無能な女性、もうひとは有能な男性。ステータスとしては視学官たちの上司に相当し、「目の上のたんこぶ」として存分に叩かれるのだ。

### (1) 私設秘書

教育長私設秘書のサベジ夫人 (Mrs Savage) は気取り屋の俗物で、見目はいいが超不愉快な人物。実力がないのに分不相応に出世した、凡ミス常習犯 (絶対に謝らない)。何にでも口出しするが、仕事は他人に押しつける。夫3人と死別した男好きで、完璧な化粧とファッションで獲物を狙う。

問題は、彼女がヨークシャー人でありながら、脱ヨークシャー志向で、イングランド人のふりをしているところにある。美容整形 (ただし成功しない) や、高価で過剰な装身具にも、背伸びする性格が出ているが、それ以上に響きを買うのは、彼女の行う「ことばの偽装」である。

地声はカエルなみのガラガラ声なのに、それを隠蔽した作り声で上流のアクセントを装い、「口にジャガイモでも入ってんのかい」(II 8) と、ヨークシャーっ子に嫌がられる。

とりわけ、セミナーかぶれでビジネスの流行語をやたらに使いたがるのには、一同閉口する。

“A what?” asked Sydney, sitting bolt upright in his chair.

“I said,” repeated Mrs Savage, speaking slowly and distinctly, “a serious clerical personnel establishment shortfall.”

“Not enough staff,” explained David.

“This was the direct result of necessary downsizing some years ago.”

“Downsizing?” said Sidney.

“Sacking,” explained David.

“We are now looking to enhance our staffing complement.”

“Employ some more people,” said David.

“So, what you are saying, Mrs Savage,” I said, trying not to laugh, “is that you recognise that we are understaffed and you are going to sort out another secretary for us.”

“Clerical assistant,” corrected Mrs Savage. (III 126)

(「あー、何だって？」とシドニーは訊き、椅子で身を起こした。

「わたくしが申しましたのは」とサベジ夫人はもう一度、ゆっくりはっきり言った。「深刻な事務方の人員配置の払底ですの。」

「人が足りないってこと。」とデイヴィッドが解説した。

「これは、数年前に要請された業務規模縮小の直接的結果ですわ。」

「業務規模縮小？」とシドニー。

「クビってこと。」とデイヴィッド。

「わたくしたちは現在、人員補填の拡大を期待しています。」

「人を増やすってこと。」とデイヴィッド。

「で、あなたが言ってるのは、サベジ夫人」と、私は笑いをこらえて言った、「ぼくらが人手不足だってわかったから、ぼくらのためにもうひとり秘書を都合してくれるってことですね。」

「事務助手ですわ。」とサベジ夫人は訂正した。）

この「大げさでわかりにくいことば」(IV 305)、「やたらに長ったらしい言い方」(V 93)、経営実務の専門用語の氾濫は、当時イギリスではThatcher's Children (サッチャーの申し子)、アメリカではyuppie (ヤッピー) と呼ばれたヤング・エグゼクティブ全盛期の風潮の反映であり、実業界の論理を教育界に導入するサッチャーの教育改革という時代の波を受けてのものではある。だがサベジ夫人の場合、そうした社会的要因よりも個人的要因が強く作用しており、中身のなさをことばの飾りでごまかすための見せかけ・見栄であって、かえって軽薄で安っぽく、ヨークシャーの成句でいう「毛皮着込んで、下はノーパン」(I 169) そのもの。人格の空疎な内実は、周囲にとっくに見抜かれている。

しかも、無駄な話が長すぎるのは、出しゃばりでしつこい性格、また頭の回転の悪さゆえでもあるのだが、この話の長さにこそ、「おしゃべり」が特徴の、ヨークシャー人の地金が出ている。

さらにユーモア感覚の欠如たるや、ヨークシャー人としても致命的。シドニーは皮肉をこめて、こう茶化する。

“We were laughing...We were sharing an amusing story, a funny little anecdote, a whimsical moment, an engaging little account...Schools are funny places, you know, my dear Mrs Savage.” (II 246)

(「ぼくらは大笑いしていたのさ……楽しい話、おもしろい小噺、気晴らしのひとつ、心ひかれるちょっとしたおしゃべりを、分かち合っていたんだよ……学校ってのは、おもしろいところ

Table 1 The Euphemistic Expressions of Mrs Savage

Volume	Page	Speaker	Expression	Translation
I	29	Julie	Mrs High-and-Mighty	お偉方夫人
	60	Julie	Savage by name and savage by nature	名前もサベジ、中身もサベジ(非情)
	102	Julie	Lady Macbeth	マクベス夫人
	113	Julie	Mrs “I could curdle milk with one of my stares” Savage	「ひとにらみで牛乳も凝(こご)る」サベジ夫人
	113	Julie	The Lucretia Borgia of the Education Department	教育局のルクレチア・ボルジア
	116	Julie	the woman in black	黒衣の女
	139	Julie	Mrs “I could turn you to stone with my stare” Savage	「ひとにらみで石に変えてやるわよ」サベジ夫人
	140	Sidney	the Queen of Sheba	シバの女王
	145	David	the wicked witch of the west	西の悪い魔女
II	8	Julie	Lady High and Mighty	レディ・お偉方
	27	David	The Ice Queen	氷の女王
	29	David	a Gorgon	ゴルゴン
	29	Sidney	Medusa	メデューサ
	58	David	the Bride of Frankenstein	フランケンシュタインの花嫁
	175	David	the Ghost of Christmas Past	過去のクリスマスの幽霊
	182	Gervase	the Snow Queen	雪の女王
	259	Gervase	hovered over me like a malign presence	悪霊みたいに憑りついていた
	336	Gervase	something worse than a ghost	亡霊より悪いもの
III	21	Julie	the Queen of the Jungle	ジャングルの女王
	22	Julie	the Black Widow	ブラック・ウィドウ(女スパイ)
	77	Sidney	The Black Death	黒死病
	182	Connie	Lady Hoity Toity	レディ・つんけん
	185	Sidney	a gargoyle	鬼瓦
IV	100	Julie	the Queen Bee	女王蜂
V	133	Gervase	the Personal Assistant from hell	地獄から来た私設秘書
	245	Julie	Brenda the Impaler	死刑執行人ブレンダ
	247	Julie	venomous Brenda	毒婦ブレンダ
	247	Julie	the Bride of Dracula	ドラキュラの花嫁
	358	Sidney	Mrs “I’m in charge and do as you are told” Savage	「あたしが仕切ってるんだから言われたとおりにするのよ」サベジ夫人

Volume I: *The Other Side of the Dale*(1998)

Volume II: *Over Hill and Dale*(2000)

Volume III: *Head over Heels in the Dales*(2002)

Volume IV: *Up and Down in the Dales*(2004)

Volume V: *The Heart of the Dales*(2007)

だからねえ、わかるだろ、サベジ夫人様。)」

「デールズ5部作」全編にちりばめられた、サベジ夫人を形容する婉曲表現の数々 (Table 1) は、イングランド志向の彼女に対し、他地域陣営の随所で多発する、ことばとユーモアによる逆襲だ。

それはシドニー、デイヴィッド、フィン、ジュリー、コニーが共同制作する、ことばのモザイク、ことばの万華鏡。アイルランド・ウェールズ・スコットランド・ヨークシャーの文化・語彙の豊かさの精華。アイルランドの饒舌、ウェールズの金言、ヨークシャーの成句がみな、ことばの武器となって威力を発揮する。

これはいわば、ガイ・フォークス (Guy Fawkes) の案山子作り。寄せ集めの襤褸でできた人形が、引きまわされ、かがり火にくべられ、焚刑に処される、11月5日のお祭りの流儀そのまま。17世紀の火薬陰謀未遂事件の首謀者ガイは、ヨークシャー出身だった。寄ってたかって、けなし、からかい、囃し、野次り、笑いあう——これはヨークシャー流のユーモラスな断罪の仕方であり、それが血祭りに上げる相手は、サベジ夫人のまとうイングランドなのである。

この難物サベジ夫人が、しかし排除されることはなく、敵の撃退に有効な隠し玉、毒を以て毒を制す時の毒として常備されるのは、したたかでたくましいヨークシャーの民の包容力と底力のなせるわざであり、もともとはヨークシャー人であるサベジ夫人への寛容さの現れでもあろう。この秘密兵器は次項のとおり実際に機能し、結果的には州教育委員会の危機の回避をもたらす。

## (2) 上司候補

主任視学官ハロルドの後任に決定したカーター氏 (Mr Carter) は、実業界から教育界への進出をもくろむ切れ者で洒落者、中央志向・権力志向のイングランド人。そのことばは「サベジしゃべり」(V 304) と同じく、流行のキャッチフレーズのオンパレードで「巧言令色、鮮 (すくな) し仁」の極み。シドニーはその空疎な本性を言い当てて、おちよくる。

“...that ceaseless flow of limp metaphors and memorised maxims beloved of management gurus like Simon Carter and our very own Brenda Savage. They use a sort of verbal wallpaper to cover the cracks in their thinking and the gaping holes in their arguments....” (III 286)

(「……サイモン・カーターみたいな経営の教祖や、うちのブレンダ・サベジがご愛用の、気の抜けたたとえとか、丸暗記した決まり文句とかが、ああひっきりなしに垂れ流しになってるのはねえ。やつらは、ことばの壁紙で、自分の考えのひび割れや、議論にぽっかりあいた穴をふさいでるのさ……。)」

ユーモアもカーター氏は徹底的に欠落。彼のひけらかす学位の数々を、当地の領主マリック卿 (Lord Marrick) は面白半分にひやかす。MBA (Master of Business Administration, 経営学修士) には「MBBA (Member of the Bull Breeders' Association, 雄牛育種家協会会員) かと思ったわい」(III 253)。BAA (Bachelor of Applied Arts, 文学士) には「羊の毛刈りの学位みたいに聞こえるのう」(III 253)。英語で baa は、伝承童謡の “Baa, Baa, Black Sheep” (「メエ、メエ、黒いヒツジさん」) でもおなじみの、羊の鳴き声。いずれも学位のコンテクストを農業にすりかえる、ヨークシャーのお国柄の出た秀逸なジョークだが、カーター氏には、とんと通じない。

ヨークシャーでは“more degrees than a thermometer”（温度計より高い温度／学位）（I 12）という成句があるくらい、もともと高学歴の人間は敬遠される風土だが、それにしても人間味のなさすぎるカーター氏の職業適性を、マリック卿は危ぶむ。

“...I do think it's important to have a sense of humour. There's enough doom and gloom in the world. A good laugh does you good, that's what I always think...You know, this new chap, Carter, was a bit of a serious cove. I hope he's going to be all right.”（III 255-256）

（「……まことに、ユーモアのセンスをもつことは肝心じゃ。世の中に破滅や憂鬱はもう十分ある。大笑いするのが身のためと、わしゃ、いつもそう思っとる……ほれ、この新人さん、カーターってのは、いささか堅物だったのう。これから大丈夫だといいいんじゃが。」）

このイングランド性の権化たるカーター氏の分離は、他地域による攻撃や駆逐という形では行われぬ。カーター氏は就任前の予備調査で、サベジ夫人の業務内容は職場に不要、そのポストのコストはただの無駄、といみじくも気づき、その合理化を提案して彼女と衝突し、急転直下、着任を辞退。いわば英国性どうしの内紛で、自分から撤退することになる。

その自爆を見守り、みずからは手を下さずに胸をなでおろす、ヨークシャーおよび他地域陣営。そのスタンスは、この一連の騒動を結局は笑い話といなす、やはり揶揄の姿勢なのである。

### 3-3 英国性の放擲

フィンの世界には、生来のイングランド性をあえてなげうち、いざヨークシャー、と馳せ参じる人物までが現れて、イングランドに対するヨークシャーの優位を決定的に裏付ける。

#### (1) 新上司

カーター氏に代わるハロルドの後任は、なんと教育省の政府視学官（HMI, Her Majesty's Inspector）、ミス・デ・ラ・メア（Miss de la Mare）。この高位の要人を迎えるにあたり、州教育委員会は職名を主任視学官（Senior Inspector）から首席視学官（Chief Inspector）に格上げして態勢を整える。

中央省庁の腕利きのキャリアが当局の慰留を振り切って都落ちを決断したのは、地方の教育と生活の質に感銘を受けたため、そしてフィンら視学官チームに心から好意と敬意を抱いたためである。しかも彼女が提示した着任条件のひとつは、村の小学校数校の、統廃合計画の撤回だった。サッチャー政権の教育改革における経費節減を率いる立場にありながら、その政策を阻止する側に回り、みずから学校コミュニティの存続に尽力する彼女は、ヨークシャー的なるものの価値を守る盾となっている。つまりこの人事は、ヨークシャー勝利宣言なのだ。

Miss de la Mareという貴族的な名は、電話口でジュリーには“Deadly Stare”（「殺人視線」）（I 171）、コニーには“Fella Beware”（「要注意人物」）（II 106）と聞き違いされ、ヨークシャーによるイングランド人揶揄の洗礼を例外なく受ける。しかし当人は、陽気で温情に富む気さくな性格、洗練とは程遠い極彩色ファッション、豊富な行政経験と教育的見識、タフなメンタル。ヨークシャーの人々にとって親しみやすく頼もしい人間的な資質が、彼女のヨークシャーへの同化を成功させている。

一方でフィン、ロンドンから移って来たものの地域になじめず退散する校長やパブのオーナーも、作中に配している。かれらの失敗は、ヨークシャーが安易な移住の可能な地ではないこと、土地の生活様式や歴史文化を尊重する心構えができていない人間には居場所がないことを、厳然とつきつける。こうした影が添うことで、イングランド人ミス・デ・ラ・メアの「ヨークシャー帰化」の覚悟は、いつそうの真実味を帯びて迫ってくるのである。

## 4. 連合——ヨークシャーへ

フィンの構造改革が向かう、もうひとつの大仕事は、ヨークシャー連合の結成である。三地域が結集してヨークシャーのために、ことばの力とユーモアの力をフル活用する大事業は、教育と結婚である。

### 4-1 教育の挑戦

三地域出身の視学官たちが、現在所属する州の教育のため協力する、という隊形は、見方を変えれば、教育においてヨークシャーが他地域を併合する、という形態でもある。

なにしろヨークシャーでの教育は、じつは他地域の叡智を注入する必要があるほどの難業なのだ。その理由はふたつ。まず学力全国最底辺の教育困難州。次に土着文化の特異性。現状打開には、視学官チームという三者の文殊の知恵、ないし三本の矢が、解決策の担い手として存在感を示す。視学官の本務はアドバイザーであり、諮問機関やブレインには、もともと外部の人間であることがむしろ望ましい資格なのである。

#### (1) 糠にあえて釘

「ヨークシャーで教育なんて、無理で無駄」という認識が歴史的にイングランド全域で存在する<sup>8)</sup>中、だからこそ挑む勇者たちの奮闘を描く「デールズ5部作」は、その世間に対する反論と反証の集積でもある。

州教育委員会の精力的な活動を伝える、この連作小説は、全巻が視学官チームの試合のスコアのようなもの。視察、調査、研修、ワークショップなど、平常業務ではおもに教員の授業力向上と児童生徒の学力定着を支援。さらに中世からの社会活動団体the Feofeesの創立500年記念行事や、毎年恒例の村の品評会Fettlesham Showにも、児童生徒の作品展示やパフォーマンス、教育相談のテント開設などで参加し、ヨークシャーの歴史と伝統の継承に寄与する。教育大臣の現地視察、ヨーロッパ各国からの視学官視察ツアーの世話など、対外的にヨークシャーの教育の良さを伝える努力も惜しまない。

多岐にわたる激務の内情と苦労話から浮かぶのは、各科目担当・各地域出身の視学官メンバーの、多彩な個性と旺盛な意欲が噛み合った、チームワークあつての達成である。「報・連・相」の見本ともいえるかれらの高いコミュニケーション能力は、そのことばの力とユーモアの力に多くを負っている。

ヨークシャー人の好む濃い紅茶はYorkshire brewと呼ばれ、「スプーンが立つくらい濃いのが、ヨークシャーのちゃんとした紅茶」(V 148) と言い習わされるほど。紅茶にスプーンが立つヨークシャーなら、糠に釘を刺しても成果が出ていい。教育に挑戦するフィンたちの結束は、この地の大いなる潜在的可能性への信頼の表明なのである。

## (2) 郷に入っては郷に従え

作中、フィンが頻繁に遭遇する想定外の珍事や奇妙な慣習は、ヨークシャー地域主義の根柢を成す事実でもある。中央の論理が通用しない土地柄であるからには、地域に密着し柔軟に対応してこそ、教育は可能となる。政府の言うことを聞かない方向で団結しないと始まらない現実が、そこにあるのだ。

ここ独特の農村文化、田舎っぷりの一例は、システムの不規則性と不合理性である。フィンは共同菜園の4番区画を借り、生えていた雑草と藪を苦勞して一掃するが、じつはそこは7番で、他人の区画。フィンが駆除したのは、村一番の名人が造るタンポポワインとスグリジャムの原料と判明する。3番と5番の間は4番じゃないのか、と動転するフィンに、土地の古老は訓戒を垂れる。

“It should be by rights, but it’s not,” the old man told me. “This is Yorkshire, lad. Things are a bit different ’ere. We’re one on us own. Tha sees it goes alternate like. It sort o’ runs contrary like a lot o’ things around ’ere.” (III 233)

(「そりゃそうじゃが、そうじゃない」とそのご老体は私に言った。「ここはヨークシャーじゃ、お若いの。ここじゃあ、ものごとはいささか違っておる。わしらはわしらのやりかたでやるでの。ほれ、それも、ひとつおきみたいになつとるじゃろ。ふつうとはまあ、逆になつとる。ここらじゃ、そういうもんは、わんさかあるでの。)」

物事が理屈に合わない形で進められることに慣れた人々に、理屈を弁じ立てても意味がない。通常の方式からの逸脱を乙と感じる人々に、正攻法で向かっても通じない。糠の深さは泥沼級だ。

教育活動を行う際も、ヨークシャー固有の習俗には特段の配慮を要する。Fettleham Showに出展する児童作品のテーマ候補に「野生動物保護」を挙げる理科担当官へ、フィンは助言する。

“Sounds good...but I would go easy on the animal conservation bit. This is a fox-hunting and grouse-shooting county, you know, and there’s some wildlife many of the locals are not very keen on preserving—pigeons and rooks, moles and rats, for example.” (III 132)

(「よさそうだね……でも、ぼくなら動物保護ものには手を出さないな。ここは狐狩りと雷鳥撃ちで知られた州だろ、それに地元民の多くは保護にそう乗り気じゃない野生動物もいるからさ——ハトにカラス、モグラにネズミとか。)」

独自の動物観を堅持する農村社会のヨークシャーにあつては、エコロジーひとつ教えるにも一筋縄ではいかないのだ。

したがって、州視学官の面々は、政府が推進する教育改革の基本路線に真っ向から対立する。デイヴィッドは学校ランキングに反対し「学校はプロサッカーじゃない」(III 242)と、サッチャー導入の競争原理を否定。体育科担当官だけに、その発言にはひとときわ説得力がある。シドニーも客観テストの統計・分析に反対し「豚は測るより食わせなきゃ」(III 242)と、これまたサッチャー導入の成果主義を却下。「ぼくらの本業は、先生たちを助けること、支えることじゃないのか」(III 242)と反駁する。

フィン「学校の最大の宣伝は、パンフレットでもデータでもなく、生徒たち自身だ」(III 278)と、礼儀・思いやり・向学心を兼ね備えた生徒こそが、学校の質の証明であることを訴える。そして、そのような生徒は「ニュースには出ないのだ」(IV 55)と、教育現場とマスメディアの乖離を指摘する。

教員についても同様だ。学位より人物本位で採用すべき、と学校評議員の神父は言う。

“...It’s not the qualifications that matter in the long run. It’s the calibre of the person. Indeed, the greatest teacher of all had no letters to His name.” (III 262)

(「……長い目で見て大切なのは、資格ではありません。大切なのは、人としての力量です。じっさい、最も偉大な教師であるキリストの名には、学位の文字など付いていなかったのです。)」

さらにフィンは州の教育における言語活動を教科横断的に調査し、口頭発表の最優秀は美術と技術、作文の最優秀は歴史と地理から出ており、科目が「国語（英語）とは限らない」(III 244)という結果を教育省に報告する。これはつまり、高い学業成果が統計をすり抜ける形で出ている、ということだ。

統計に載らない重要事の最たるものは、教員のユーモア感覚である。教育におけるユーモアの重要性を、フィンはオックスフォード出の名物教師に、こう語らせる。

“...an attribute of considerable importance in teaching...a sense of humour. Sadly, education for some is such a deadly serious business, and yet young people are naturally very funny and do enjoy sharing a joke or listening to an amusing story. Humour, in my opinion, is highly related to learning and adds inestimably to our quality of life.” (IV 48)

(「……教職では相当に大事な資質ですよ……ユーモアのセンスは。悲しいことに、教育をどうしようもなく四角四面な仕事にしちゃってる人もいますがね、若者ってのはもともと、すごくおもしろいし、冗談や可笑しい話をほんとに喜びます。私に言わせりゃ、ユーモアは学びに直結してるし、われわれの生活の質に、測り知れないくらいプラスになるんです。)」

この教員の持論を実証するのが、また別の若手教員の授業だ。彼のクラスで生徒たちの演じるヨークシャー方言版『ハムレット』(IV 65-66)は大傑作。生活感たっぷりの表現となじみ深い発音で、シェイクスピアの世界に親近感と笑いがあふれる。フィンが引用する台詞は延々2ページにわたり、そのまま台本として使えるようになっていて、実践例として紹介するだけでなく、教材として提供し、現場に活用してもらおう、という意図がにじむ。

教育を行う場所としてなんとも手ごわいヨークシャーに効く、切り札の一つは、このユーモアであろう。笑いではひけをとらない視学官たちは、ユーモアという武器を携えて、ヨークシャー連合の有能な成員となりおおせるのである。

#### 4-2 結婚のススメ

フィンとミス・ベントリーの結婚は、他地域出身の視学官と地元の小学校長、すなわちアイルラ



ンド・スコットランドとヨークシャーの結合を象徴する慶事。この実現に向けて、シドニーとデイヴィッドはともに、弱気のフィンを激励する。それはアイルランドとウェールズの協定強化であり、ことばとユーモアが持つ政治力の発現でもある。

(1) ダブルス

シドニーとデイヴィッドの共同応援は多様な形態をとる。あの手この手で、及び腰のフィンを動かそうとするふたりの提携には、視学官としての仕事ぶりの敏腕・多才も推察できる。

まずは、ふたりのトレードマークである漫才の形。

“You, of all people, Gervase,” continued Sidney, “are supposed to possess the higher order language skills, the ability to use words at their richest and most persuasive. Can’t you pen her poem and write it in chalk down the path to Winnery Nook School? – something along the lines of ‘Oh dearest heart, come kiss me gently, Be my love, my Christine Bentley.’”

“I’d stick to painting and stuffed animals if I were you, Sidney,” said David. “He doesn’t want to frighten her off with that sort of doggerel, or get arrested for defacing school property.”

“I’ll have you know it worked with my wife,” retorted Sidney. “When I painted my Lila a poem on the wall of her flat she was putty in my hands.”

“Probably drunk,” said David.... (II 317)

（「よりによって、きみは、ジャーベイズ」とシドニーはたたみかけた、「優れて高度な言語の技巧の持ち主ってことになってるんだろ、ことばの豊かさと説得力を最大限に引き出す能力があるんじゃないのかい。彼女に捧げる詩でもちよいとひねりだして、ウィネリー・ヌック小学校の通学路にチョークで大書したらどうなんだ——なんか、こういう線でき、『おお、いとしのきみよ、われに優しきくちづけを、わが恋人となれ、クリスティーン・ベントリーよ』みたいな。」

「おれがあんたなら、お絵描きと動物の剥製に専念するね、シドニー」とデイヴィッド。「そんなへボ詩で相手をドン引きさせたり、学校財産損壊容疑で逮捕されたりなんて、ごめんだろ。」

「言っとくけど、うちの奥さんには効果ありだったんだぜ」とシドニーはやり返した。「ライラが住んでたアパートの扉にペンキで詩を書いたら、もうこっちのいいなりさ。」

「たぶん酔っぱらってたんだろ」とデイヴィッド……。)

個別にフィンを説得する時も、ふたりの趣旨は一致する。まず、シドニー。

“...If I were not a happily married man, I should be in there like a tom *cat* with its tail on fire.” (emphasis added) (I 131)

（「……もしぼくが結婚生活のうまいって男じゃなけりゃ、しっぽに火のついたおすネコみたいに飛びつくところさ。」(下線は引用者))

“You’re young, well relatively so, still in your prime, personable, intelligent, reasonably

good-looking, have your own hair, full set of teeth and a good, secure job with plenty of prospects....” (I 218)

(「きみは若い、まあ、わりとそうだよな、まだ盛りで、人当たりもよくて、知的で、そこそこ見栄えもいい、髪も自前、歯も一式揃ってるし、お堅い安定した仕事で前途有望ときてる……。)」

そして、デイヴィッド。

“And I’ll tell you this, if I was fancy-free, with a bit more hair on my head and less of a spare tyre around the tummy, I’d be after her like a *rat* up a drainpipe.” (emphasis added) (II 59)

(「それからこれは言っとくぞ、もしおれに結婚のしがらみがなくて、もうちょっと頭の毛が多くて腹回りのスペアタイヤが少なかったら、下水管を駆け上がるネズミみたいに彼女を追いかけてるぞ。」(下線は引用者))

ふたりの鼓舞は、言い方は違うが内容は同じ、心はひとつ。引き合いに出す動物もネコとネズミで相呼応し、トムとジェリーのようなシドニーとデイヴィッドの関係そのままの取り合わせで、抜群の連携ぶりである。

ふたりがフィンのため相互に休戦し、あからさまに共同戦線を張る場面もある。

“Hello, Harold Yeats here...Gervase, it’s for you. Miss Bentley of Winnery Nook.”

Sidney and David both turned to stare at me with expectant look on their faces. (I 161)

(「もしもし、こちらはハロルド・イエイツ……ジャーベイズ、きみに電話。ウィネリー・ヌック小学校のミス・ベントリーから。」

シドニーとデイヴィッドは、ともに振り返って私を見つめ、期待の表情を顔に浮かべた。)

ここでは、ふたりの視線も、ひとつ。応援団としての団結が丸出しになる。

ついにはデイヴィッドが、シドニーに同調することを公然と認め、真情を明かす。

“Much as I am loath to admit it,” ventured David, who had been listening intently, “Sidney, despite his bluntness, is perfectly right. You have to let her know how you really feel about her.” (II 317)

(「ほんつとうに、言いたかないが」と、それまでじっと聞いていたデイヴィッドが切り出した。「シドニーの言ってることは、ぶっきらぼうだけど、完全に正しいよ。きみは彼女に知らせなきゃ、彼女のことをほんつとうはどう思っているのか。)」

フィンが重い腰をようやく上げたのは、この真率なことばに心を動かされたからである。結婚という形のヨークシャー連合の成就是、味方の援護なくしては不可能だったといえよう。

(2) シングルス

とくに、フィンの着任当初から、いつもなにくれとなく気にかけてくれていた先輩、シドニーの励ましの名台詞は、枚挙にいとまがない。

“Never neglect your love life, Gervase. You cannot beat the love of a good woman....”  
(I 72)

(「恋愛生活を決しておろそかにしちゃいけないよ、ジャーベイズ。善良な女性の愛に勝るものはないからね……。」)

“Thirty-one, attractive, educated, desirable, generous, good-natured and, more importantly, single and unattached— “

“Please don’t go on, Sidney.”

“You’re love’s young dream, dear boy!”

“Hardly.” (I 131)

(「31歳で、魅力的で、教養があって、感じがよくて、寛大で、気がよくて、そしてなにより、独り者でフリーだ——」)

「頼むから、そこまでだ、シドニー。」

「きみこそ愛の若き夢だ、若者よ！」

「とんでもない。」)

“Take your own advice, dear boy. Chance your own arm, go for it, take a measured risk, grab the bull by the horns.” (I 217)

(「人に言っていないで、自分でそうするんだ、若者よ。いちかばちか、やってみるのさ、当たって砕けろ、ある程度は危険を冒さなきゃ、恐れず困難に立ち向かうべし、だよ。)」)

“But if you don’t chance your arm,” persisted Sidney, “you will never know.” (I 218)

(「そうは言っても、いちかばちか、やってみなけりゃ」とシドニーは食い下がった、「わからないじゃないか。)」)

“Just thinking about it is no use. ‘Faint heart never won fair maiden’, as Shakespeare or somebody or other once said. You need to take action, dear boy.” (I 218)

(「ただ検討してるだけなんて、なんにもならんよ。『弱気で美人を得たためしなし』って、シェイクスピアだったか、だれだったか、とにかくだれかが、言ってただろ。行動に出なきゃ、若者

よ。』)

とにかく、しつこい。親切や世話焼きを通り越して、しつこい。このしつこさ、粘り、諦めない強靭さが、視学官の仕事にも生かされていることは容易に想像できる。しかしこれはむしろ、視学官というより外交官の交渉術に近いものがある。連合の達成には、こうしたロビー活動ばりのことばの力が、政治力を発揮していたのだ。

#### 4-3 求婚の風景

フィンの求婚とミス・ベントリーの受諾、という連合成立の場面は、痛快なまでに、ひたすらどんくさく、とことんユーモラスな、抱腹絶倒の一章である。<sup>9)</sup>どこまでもヨークシャー流の、その展開には、二人の結合が根を下ろす土地と民の、土臭さと日向臭さ、明るさと温かさがあふれる。このきわめつきのコメディは、ヨークシャーへの統合を寿ぐ、祝祭の風景なのである。

##### (1) 笑劇

ロマンチックなプロポーズが、転じて大爆笑の村芝居。ミス・ベントリーもヒロインどころか、フィンの相方。まさに「ミスター・アンド・ミセス・フィン」の名がはまる息の合った掛け合いは、ムードよりもユーモアの大事なヨークシャー式結婚を実演した興行。恋愛の成就是、終始、周囲の土地っ子の笑いに包まれて進行する。

意を決し、デイヴィッドおすすめのレストランを予約したフィン。しかし頼んでおいたタクシーは、意に反して、ぼろぼろのよれよれでタバコ臭い（だが、ミス・ベントリーは気にしない）。

店に着いたら、静かな個室のはずが、うるさいフロア席で、雰囲気も何もない（だが、ミス・ベントリーは気にしない）。

出てきた料理もワインも、かなりいまいち（だが、ミス・ベントリーは気にしない）。

あげくには（静かな個室のほうに来ていた）ドクター・ゴアとサベジ夫人に出くわす。上司のいるところでなんか無理、といったんは断念するフィンだが、上司たちの仲を話題にするミス・ベントリーの話の聞いているうち、感情が激して、なりふりかまわぬ本音爆発プロポーズを決行してしまう。<sup>10)</sup>

“Christine! I am really totally uninterested in Dr Gore and Mrs Savage at the moment. There really is something I have to ask you...I know this is not the best place to say this, but I really have to say it now. You don't have to answer me right away. You might want to think about it. It's just that I think you are the most beautiful, wonderful, amazing person I've ever met and, well, I love you. Yes, I do, I love you. I can't stop thinking about you. It's making me ill. I want you to be my wife.”

“Oh.” (II 338)

（「クリスティーン！ドクター・ゴアとサベジ夫人のことなんて、いまはほんとに全然、どうでもいいんだ。ほんとはきみに言うことがある……ここは言うのに一番いい場所じゃないってわかっているけど、ほんとにいま言わなくちゃ。すぐに答えなくてもいい。考えたいかもしれないし。つまり、きみはいままで会った中で一番、きれいで、すばらしい、すごい人で、それで、ええと、きみを愛してる。そう、そうなんだ、愛してるんだ。きみのことしか考えられない。もう病気に

なりそうだ。妻になってほしいんだ。」

「まあ。」)

シドニーなら思いっきりツッコミを入れそうな、何の技巧もないむきだしのことば。そして続くミス・ベントリーの返事も、ほとんど露骨。

“Will you marry me, Christine? You may want to think about it— “

“The answer is ‘No’,” Christine replied immediately.

“No? Oh, no!” Her answer was like a bullet to the heart.

“No, I don’t need to think about it, Gervase. Of course I’ll marry you.”

“*You will?*” I shouted loud enough to turn the entire noisy restaurant silent. “You’ll marry me?”

“Of course, I will.” (II 338)

(「ぼくと結婚してくれないか、クリスティーン？きみは考えたいかもしれない——」

「返事は『いいえ』よ」と、クリスティーンは即答した。

「いいえだって？なんてこった！」彼女の返事は、まるで心臓を打ち抜く弾丸だった。

「いいえ、考える必要はないわ、ジャーベイズ。もちろんあなたと結婚するわ。」

「してくれるのかい？」あんまり大声で叫んだので、うるさかったレストランじゅうが静まり返った。「ぼくと結婚してくれるのかい？」

「もちろんよ、するわ。」)

店を出て将来を語るふたりの会話も、やはり虚飾のないことば、漫才そのもののユーモアで、ヨークシャー・スタイルの見本。

“I’d like six,” I said, wrapping my arms around her waist.

“Six what?” Christine asked.

“Children. I’d like six children.”

“Let’s think about that later, shall we?” she replied, reaching up to kiss me.

“You *do* want children?” I asked.

“Yes, of course, but not right at this moment and I might want eight.” (II 340)

(「6がいいな」と私は言って、彼女の腰に両腕を回した。

「なにが6？」とクリスティーンは訊いた。

「子どもだよ。子どもは6人ほしいな。」

「それはあとで考えましょうよ」と彼女は言い、背伸びして私にキスした。

「子どもはほしいんだよね？」私は尋ねた。

「ええ、もちろんよ、でもいますぐじゃないし、私は8人ほしいかもよ。」)

きわめつけは、方言での幕切れ。迎えに来たオンボロタクシーの運転手に、フィンは昂然と告

げる。

“Are you two all reight?”

“We’re champion, aren’t we, Chris?” I exclaimed robustly, in true Yorkshire fashion.  
“Just champion!” (II 340)

(「おふたりさんよ、でえじょうぶけえ？」

「ぼくらは万々歳さ、ねえ、クリス？」私は叫んだ、野太く、まさにヨークシャー流に。「そりゃもう万々歳さ！」)

ミス・ベントリーの承諾が、上流階級のアクセントで話す、裕福で美男で、しかし高慢で傲岸だった貴族のボーイフレンドを振ってのものであることに照らすと、“champion”（最高）というヨークシャー方言は、イングランドに対する勝利宣言の意味も帯びる。ふたりの成婚は連合の核をなす「最高」の祝事として、連合の公用語である方言で、見事に祝砲を放つのである。

## (2) 祝福

本来はきわめてプライベートなものであるはずのプロポーズが公の場にさらされる、この章の展開は、これが私事ではなくヨークシャー連合の公式行事であることを印象づける。どのシーンもいちいち観客が立ち会う形になるのは、地域社会の承認と祝福を受けるためなのだ。

店の喧騒が一瞬にして静まり、求婚の瞬間が客全員に目撃される時も、語らいの夜にタクシーの運転手が割って入る時も、この傍観者たちは決して邪魔者扱いされてはいない。かれらは喜びを分かち合う参賀客であり、その存在はヨークシャーの包容力の具現となっている。

すべてが同席者に公開される趣向は、フィンがお手洗いで予行練習をする場面に顕著である。

I had rehearsed what I would say so many times I knew it backwards...I looked in the mirror, smiled and said out loud: “I think you know how I feel about you. Over the year I’ve grown closer and closer to you. You’re always in my thoughts, you’re forever in my dreams. Ilove you, I’ve always loved you, I’ve loved you since I first saw you.” I paused for effect. “I just cannot live without you. I want to spend the rest of my life with you. Darling, will you marry me?”

There was a loud flushing noise, a cubicle door opened and the man with a clarety complexion and heavy jowls from the next table emerged with a bemused expression. He joined me at the washbasin where he proceeded to wash his hands vigorously.

“I’m afraid I can’t,” he said bluntly.

“I’m sorry?”

“Marry you. I’m married already. I’ve been married for fotty-five years. But thank you for asking—I shall always treasure the memory.” Then chuckling to himself, he left me to my thoughts. (II 334-335)

(これまで、もう何度も、言うつもりのことをリハーサルしていたので、もう逆からだって覚えていた……私は鏡をのぞきこんでほほえみ、朗々と声に出して言った。「ぼくがきみのことを

どう思っているか、きみもわかっていると思う。この一年、少しずつ、ぼくはきみと親しくなってきたね。きみはいつだってぼくの心の中にいて、いつまでもぼくの夢の中にいる。きみを愛してる、ずっと愛してた、初めて会った時から愛してたんだ。」私は間をおき、効果を高める。「もう、きみなしでは生きられない。これからの人生を、君と送りたいんだ。ダーリン、結婚してくれないか。」

トイレを流す音が盛大にして、個室の戸が開き、さっき隣の席にいた赤ら顔で顎の垂れたおっさんが、困惑した顔で出てきた。彼は私の横の洗面台に来て、猛然と手を洗いにかかった。

「悪いが、できねえな」と彼は、ぶっきらぼうに言った。

「は？」

「おめえと結婚だよ。おらあ、もう結婚してる。結婚45年目にならあ。だども、申し込んでくれて、あんがとよ——この思い出をずっと大切にするでの。」それから彼はひとり悦に入って立ち去り、私は残されて茫然とした。）

とびきりロマンチックな台詞がとんでもない大恥に転じ、ロマンスはまったくのコメディになる。そして婚約が成立するや、真っ先に祝意を表しに来たのは、この村人だった。

Making his way to the bar was the claret-faced man who had heard the final rehearsal of my speech in the gents.

“Well done, lad,” he chuckled, thumping me on the back. “I knew thy’d fettle it.” (II 338)

(バーのほうにやって来たのは、紳士トイレで私の口上の最終リハーサルを聞いた、あの赤ら顔のおっさんだった。

「よくやった、にいさん」と彼はくすくす笑い、私の背中をばんと叩いた。「おらあ、おめえなら、でかすと思っただよ。」)

“thy” (おめえ)、“fettle” (でかす、やってのける) (Maskill 17) と、ヨークシャー方言で呈されたこの祝辞には、住民の温かさがこもっている。

かつて視学官採用面接に合格した時も、フィンが州庁舎の庭師から同様の祝賀を受けていた。

“I thought you would,” he said. “I’m a pretty good judge of character. I had my money on you from the start.” (I 23)

(「おめえさんなら、いけると思っと思ったわ」と彼は言った。「おらあ、とびっきり目利きでの。はじめっから、おめえさんに賭けてただよ。」)

控室でインテリ候補者たちに気圧されたフィンは、待ち時間に外の空気を吸いに出て、この庭師と出くわし、しばし世間話に興じて気分転換になっていた。学位や業績を鼻にかける他の応募者たちとは違い、土地の人々と気さくに話せる人柄を買われて採用になったフィン。庭師は、さきほど話題になっていた近くの競馬場にちなみ、フィンをダークホースに見立てて、心憎い台詞を贈る

のだ。郷土の風物に慣れ親しんで暮らすヨークシャーっ子のぬくもり、そして、これと見込んだ人間をふとくろくに迎え入れるおおらかさが、そこにはある。

このように地域に根付く形でこそ、連合は完成する。<sup>11)</sup>その祝宴の舞台に横溢するのはやはり、観客席も含めての、ことばとユーモアの力だったのである。

## 5. 結

フィンの作品世界に通底するのは、アイルランド・ウェールズ・スコットランドと対等な独立性を持った地域としてのヨークシャー観である。これまで前三者と組んで連合王国を結成していたイングランドは、もはや連合の相手ではなく、分離の対象となる。イングランドを押しつけて、その空席に収まるのがヨークシャーである。したがって、これは、反イングランド連盟実現およびヨークシャー独立という、大胆かつ過激ですらある反体制思想を孕む、一種のユートピア小説であるともいえる。

しかし物語は、いたって穏健で滑稽な、飄々たるトーンで一貫しており、政治的な色合いは、ほのぼのとした寓話の中にくるみこまれている。じつはここにこそ、フィンの諷刺の特徴がある。フィンが、個性の協力で個別の教育ニーズにあたる州教育委員会の奮闘を楽しく可笑しく描けば描くほど、統一型サッチャー政策の冷たさが、より痛烈に強調される。ヨークシャーの物語が心温まるものであればあるほど、イングランドおよび中央省庁の官僚制に刺さる諷刺の棘は、その分ますます鋭くなる仕組みである。逆説的な形をとってはいるが、フィンは、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) 以降のアイルランド諷刺文学の伝統に、確実に連なっている。

そしてフィンは、現在のヨークシャー地域主義の動向とも、強く連動している。「ヨークシャーが頂点のヒエラルキー」という真逆の世界を仮想する寓話ではあっても、それは現実のパロディや陰面に終わることなく、「そういう世界への願望が実在する」という現実をリアルに提示する。「現実離れ」ではなく「現実の先取り」、「あるべき現実」という、もっと本気のメッセージがそこには提出されている。

2014年結成のヨークシャー党 (Yorkshire Party) は、面積はイングランドで最大、人口はスコットランドと同数、経済規模はウェールズの倍もある地域として、ヨークシャー独立議会の設置を主張しており、党の綱領には教育重視も掲げられている。地霊としてのことばとユーモアの力を豊富に内蔵したフィンの作品は、ヨークシャー独立運動の「笑えるプロパガンダ」として、党のマニフェストを補強し増強する政治的意義も担っているのである。

### 注

- 1) フィンはスコットランド系のクォーターでもあるが、作品には出自のスコットランド色はあまり反映されない。サッチャー政権下の教育の状況に対する観方をスコットランド系から補うものとして、フィンとともにヨークシャー学校小説の双璧を成す、元・小学校長の作家ジャック・シェフィールド (Jack Sheffield, 1945-) の『先生』シリーズ (*Teacher series*, 2004-) がある。フィンとシェフィールドの相乗作用については、武田 (2018) を参照のこと。
- 2) フィンがイレブン・プラスに落ちてグラマー・スクールに行けず、大学進学コースから外れたが、入学したセカンダリー・モダンの熱心な教育で、まさかの大学進学の道が開けた経緯については、武田 (2019b) を参照のこと。
- 3) 世界中で祖母の役割を実地調査し、伝統文化のほとんどで祖母が大きな影響力と権威を持っているこ



とを明らかにしたKitzinger (1997) を受け、Elgin (1998) はアメリカ文化の若者志向を嘆き、「祖母の掟」のアメリカ版を起草している。デイヴィッドが祖母の知恵を頻繁に援用・参照することには、ウェールズの伝統文化を継承する意図と意義がある。

- 4) この人物はフィンの『小さな村の学校』シリーズ (*The Little Village School series*, 2011-16) では Grandma Mullarkey として登場し、その「アイルランドのおばあちゃんの知恵」が頻繁に引用される。
- 5) イギリス教育小説における学校掃除婦の表象については、武田 (2019a) を参照のこと。
- 6) この実例が、視察先の学校に通うトラベラーの児童に見られる。想像力も表現力も豊かなこの少女は、アイルランド系の文学者の血を享けた存在として、次のように称賛される。

She had a real and natural gift for oral language, a rich, persuasive, entertaining way of speaking so typical of the Irish. Hers was the language of Jonathan Swift and Oliver Goldsmith, W. B. Yeats and George Bernard Shaw, Oscar Wilde and James Joyce. (I 255)

(この子にはあった、本物の、生まれながらの、話しことばの才能が。含蓄に富み、なるほどと思わせ、相手を楽しませる話し方は、まさにアイルランド人特有のものだった。この子の言語は、ジョンナサン・スウィフトとオリバー・ゴールドスミス、W・B・イエイツとジョージ・バーナード・ショー、オスカー・ワイルドとジェイムズ・ジョイスの言語だった。)

このキャラクターは、『小さな村の学校』シリーズでも名前を変えて顔を見せ、重要な役どころとなる。

- 7) そのためフィンは、ハロルドに次のように言われて、まんざらでもない。

“I must say when I saw the name Gervase Phinn on your application form, I imagined a rather lean, sophisticated, Oscar Wilde-like figure.” (I 36)

(「はっきり言って、応募書類でジャーベイズ・フィンって名前を見たときには、細身でおしゃれなおスカー・ワイルドみたいな人を想像したよ。)
- 8) 「ヨークシャーで教育をする」という試みがそもそも無茶である、という英国の社会通念については、武田 (2019b) を参照のこと。
- 9) この『丘を越え谷を越え』第24章は、「英文学史上、最も滑稽な30ページ」(森村360) と呼ばれたウッドハウス (P. G. Wodehouse) の『よききた、ジーヴス』(*Right Ho, Jeeves*, 1934) 第17章に並ぶ、ユーモア文学の白眉といえる。
- 10) いざという時にまさかの衝動的・突発的な行動に出る、フィンのきわめてアイルランド的な素質が出た瞬間。新婚の住宅購入の際も、オークションで同様の現象。(III 210)
- 11) フィン夫婦が新居として古いコテージを購入し、長期にわたり苦勞して修繕することには、ヨークシャーの風景に同化し、歴史と文化を保存しよう、という強い意志が見出される。

#### 参考文献

- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. New Haven: Yale University Press, 1992.
- . *Acts of Union and Disunion: What has held the UK together—and what is dividing it?* London: Profile Books, 2014.
- Elgin, Suzette Haden. *The Grandmother Principles*. New York: Abbeville Press, 1998.
- Jarvis, Stan. *Discovering Christian Names: Over 2000 Names with their Meanings*. Princes Risborough: Shire Publications, 1973, 1995.
- Kitzinger, Sheila. *Becoming a Grandmother: A Life Transition*. 1996; New York: Fireside, 1997.
- Maskill, Louise. *Yorkshire Dialect: A Selection of Yorkshire Words and Anecdotes*. Sheffield: Bradwell Books, 2013.
- Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin, 2010.
- . *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin, 2010.
- . *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin, 2010.

- . *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin, 2010.
- . *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin, 2010.
- . *Road to the Dales: The Story of a Yorkshire Lad*. London: Michael Joseph, 2010; London: Penguin, 2011.
- . *Out of the Woods But Not Over the Hill*. London: Hodder & Stoughton, 2010.
- . *The Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2011.
- . *Trouble at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2012.
- . *The School Inspector Calls!* London: Hodder & Stoughton, 2013.
- . *A Lesson in Love*. London: Hodder & Stoughton, 2015.
- . *Secrets at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2016.
- . *The School at the Top of the Dale*. London: Hodder & Stoughton, 2018.
- Sheffield, Jack. *Teacher, Teacher!: The Alternative School Logbook 1977-78*. London: Central Publishing Services, 2004; London: Corgi, 2007.
- . *Mister Teacher: The Alternative School Logbook 1978-79*. London: Corgi, 2008.
- . *Dear Teacher: The Alternative School Logbook 1979-80*. London: Bantam, 2009.
- . *Village Teacher: The Alternative School Logbook 1980-81*. London: Bantam, 2010.
- . *Please Sir!: The Alternative School Logbook 1981-82*. London: Bantam, 2011.
- . *Educating Jack: The Alternative School Logbook 1982-83*. London: Bantam, 2012.
- . *School's Out!: The Alternative School Logbook 1983-84*. London: Bantam, 2013.
- . *Silent Night: The Alternative School Logbook 1984-85*. London: Bantam, 2013.
- . *Star Teacher: The Alternative School Logbook 1985-86*. London: Bantam, 2015.
- . *Happiest Days: The Alternative School Logbook 1986-87*. London: Corgi, 2017.
- . *Starting Over: A Ragley Story 1952-53*. London: Bantam, 2018.
- Wodehouse, P. G. *Right Ho, Jeeves*. 1934; Harmondsworth: Penguin, 1964.

“Education—Yorkshire Party.” Yorkshire Party. 20 May 2018

<<http://www.yorkshireparty.org.uk/education/>>

コリー、リンダ。『イギリス国民の誕生』。川北稔・監訳。名古屋大学出版会、2000。

武田ちあき。「サッチャーのお化け——ヨークシャー学校小説シリーズによみがえる英国の幻」。『憑依する英語圏テキスト——亡霊・血・まぼろし』第8章。福田敬子・上野直子・松井優子・編。東京：音羽書房鶴見書店、2018。183-204。

---。「イギリス教育小説における学校掃除婦の表象——その文化的意味と政治的機能——」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第68巻、第1号、2019a。271-284。

---。「ジャーベイズ・フィンの学校小説における教職観——その社会的・時代的・地域的な意味——」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第68巻、第2号、2019b。367-388。

森村たまき。「訳者あとがき」、『よしきた、ジーヴス』。P・G・ウッドハウス著。森村・訳。東京：国書刊行会、2005。355-364。

(2019年9月14日提出)

(2019年10月10日受理)

# Union and Disunion in Yorkshire School Novels: Politics and Power Balance of Regional Elements

**TAKEDA, Chiaki**

Faculty of Education, Saitama University

## **Abstract**

This paper aims to read Gervase Phinn's Yorkshire school novels as a parable of union and disunion of major regions in the United Kingdom. By analysing the characters and plots in the *Dales* series (1998-2010), this study pursues the politics and power balance of regional elements in the story and discovers a curious pattern of subverting the conventional hierarchy. In Phinn's world, Irishness, Welshness and Scottishness are united to serve Yorkshire while Englishness is suppressed, diverged, mocked and even despised. The series depicting the Education Board of Yorkshire under Thatcherism, though dubbed non-fiction, comprises an allegory of alliance and discord among regions to be received by the reader in the twenty-first century when globalism threatens national and regional identity in manifold ways. Phinn's novels have a mildly but definitely Utopian nature with a tinge of Irish satire reminding of Jonathan Swift; yet unlike Swift, in Phinn's work characteristically and paradoxically, the more humorous and heart-warming his narrative of Yorkshire schools is, the more biting and stinging it functions to criticise the cold, dismal and humourless business and policy of the Westminster. Demonstrating that humour and language are positively powerful weapons needed in the battlefield of education, both for teachers and administrators, Phinn's books can also act as a comical propaganda for regionalism as found in the manifesto of Yorkshire Party.

**Keywords:** school novels, Yorkshire, Irishness, Welshness, Scottishness